校長室だより～燦燦～ №５３８

跋文

2022.4.14

振り返れば、焼け跡のバラックの四角い青空を目を薄く、高く見上げていた児童がいました。胸を締めつける不安を抱きつつ夜行集団就職列車に乗り込んで行った生徒がいました。進学率の上昇と高学歴化による受験戦争の激風に身をさらされた受験生がいて、繁栄へとひた走る時代の途上でこの国の未来を探しあぐねシュプレヒコールの渦の中にいた学生がいました。物質的豊かさと引替えに深刻化していった校内暴力やいじめの中に懊悩していた児童生徒は、かれら「子どもたち」の子どもでした。

この文章を読んだときの衝撃は今でも覚えている。あれは平成２０年の冬だった。注文した書籍が職場に届いた。「教職員服務関係ハンドブック　福島県教育庁　編著」という分厚いお堅い感じの代物だった。だが、名前はというとハンドブックだった。

教職員が日頃使うことの多い服務や勤務に関することが、根拠となる法令とともに載っているものである。当時、教頭職に就いていた私は迷うことなく注文した。以前は「教職員服務関係法令解説」というものだった。それが改訂され新たにハンドブックとなった。

あの独特の新しい本の香りをかすかに感じながら表紙をめくってみた。当時の県教育長の名による「序文」がある。当然の展開である。さらに進むと目次となる。これも予想の範疇である。次からが本編である。

そして、裏表紙の手前のページを開けてみた。飛び込んできた二文字が「跋文」だった。読めない。漢字が読めないときには国語辞典は役に立たない。ではどうするか。滅多に使わない漢和辞典の登場となる。私はよく総画数から調べていく。地道で確実な方法である。実に私らしい。

だが、このときは国語教員としてのプライドが許さなかった。偏と旁から成る漢字の場合は、多くの場合、旁が音を表している。「バツ」ではないかと予想を立てた。国語辞典を手にした。「バツブン」見つけた。「本文とは別に、書物の終わりにしるす文章。あとがき。⇔序文」とあった。序文に対しての跋文だった。

そこには、それまでの私が知らない高いレベルの世界があった。けっこうショックだった。このハンドブックは県内の先生方や教育関係者が使うことを前提にしている。私も教員である。にもかかわらず、あとがきの位置に、それまで見たことがない漢字が出てきたのである。読めないし、意味もわからない。ハンドブックとは言いながら、随分と距離があるように思えたことを覚えている。

この時点ではわからなかったが、この跋文を書いたのは高校の先生である。その人の名前だけは私の頭に刻み込まれた。このときはまだ、その後まもなく高校の先生と一緒に働く職場に異動になることも、あの跋文の方が目の前に現れることも知らない。